

平成31年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第1号（5月予報）

平成31年4月23日 秋田県病害虫防除所

【内容】 I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は5月を主とします。次回の発表予定は令和元年5月28日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 http://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	苗いもち（苗の葉いもちを含む）の発生量は平年並と予想されます。育苗期いもち病防除は必ず行い、伝染源となる稲わらや籾殻は育苗施設やその近傍に置かないでください。 苗立枯病の発生量は平年並と予想されます。育苗期間中は温度管理に注意し、土壌の湿度を適切に保つようにしてください。
小 麦	赤かび病の感染時期はやや早い、感染量は平年並と予想されます。1回目の防除は開花始期に行い、2回目は1回目の防除から7～10日後に行ってください。
大 豆	タマナヤガの発生量はやや少ないと予想されます。本種は飛来性害虫であり、急激に発生量が増加することがあるため、今後の予察情報に注意してください。播種前にほ場内やほ場周辺の除草を行ってください。
えだまめ	ネキリムシ類（タマナヤガ）の発生量はやや少ないと予想されますが、播種前にほ場内やほ場周辺の除草を行うとともに例年被害が見られるほ場では薬剤を塗抹処理した種子を播種するなどの防除対策を実施して下さい。
果 樹	りんごでは腐らん病、黒星病、ナミハダニの発生が多いと予想されます。腐らん病は樹体検診を実施し、早期発見・早期治療に努めましょう。黒星病は園内の発生状況をよく観察し、発病葉や発病果実は見つけ次第摘み取り、焼却しましょう。防除薬剤については3月26日発行の防除対策情報第10号を参照してください。苗木には展葉後にベフラン液剤25 1,000倍を散布してください。ナミハダニは徒長枝の剪去、焼却処分を開花中及び落花20日後頃の2回行いましょう。

果 樹	なしでは黒星病が多いと予想されます。芽基部病斑は速やかに切除し処分しましょう。薬剤防除は3月26日発行の防除対策情報第11号を参照してください。
-----	--

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	苗いもち	全県	—	—	平年並
	苗立枯病 (ピシウム菌) (リゾープス菌)	全県	—	—	平年並
		全県	—	—	平年並
	イネミズゾウムシ	全県	平年並	—	やや少ない
	イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	全県	平年並	—	やや少ない
	イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ)	全県	平年並	—	やや少ない
	フタオビコヤガ (イネアオムシ)	全県	平年並	—	やや少ない
	イネキモグリバエ (イネカラバエ)	全県	—	—	やや少ない
小 麦	赤かび病	全県	やや早い	—	平年並
	うどんこ病	全県	—	—	やや多い
大 豆	タマナヤガ	全県	—	少ない	やや少ない
えだまめ	ネキリムシ類 (タマナヤガ)	全県	—	少ない	やや少ない
りんご	腐らん病	全県	—	多い	多い
	モニリア病	全県	平年並	—	やや多い
	黒星病	全県	平年並	—	多い
	ナミハダニ	全県	—	—	多い
	リンゴハダニ	全県	—	—	平年並
	ハマキムシ類	全県	平年並	—	平年並
	果樹カメムシ類	全県	平年並	—	やや少ない
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	平年並	—	多い
	黒斑病	県北部・県中央部	平年並	—	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	—	やや多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	—	—	平年並
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	平年並	—	やや少ない
ぶどう	黒とう病	県南部	平年並	—	平年並

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬がハウス内土壌に浸透しないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で散布してください。

詳細は2019年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 苗いもち (苗の葉いもちを含む)	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、前年の穂いもちの発生量は平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

○苗の葉いもち

ア、育苗施設の近傍や施設内に稲わら・籾殻を置かない。

イ、育苗期間に1個でも病斑が認められた場合は、同一育苗施設の苗は移植しない。

ウ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施する。

①ベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL又は1,000倍液を箱当たり1L、播種時～播種7日後頃にかん注する。

②ビームゾル500倍液を箱当たり500mL、緑化始期にかん注する。

エ、種子消毒にタフブロック又はエコホープDJを使用した場合は、上記ウ①のうち播種時処理を行わない。

○本田の葉いもち

ア、育苗期間～移植当日に施用する本田の葉いもちを対象とした防除薬剤には、箱施用剤、側条施用剤があり、防除効果の持続期間は7月中旬頃までである。

イ、県内でQoI剤(ストロビルリン系剤)に対する耐性菌が確認されているため、本剤は使用しない。

ウ、箱施用剤を使用する場合は、次のいずれかの方法で防除する。薬剤によって使用時期が異なるため注意する。

①アプライ箱粒剤、デジタルコラトップアクタラ箱粒剤、ブイゲット箱粒剤のいずれかを箱当たり50g散布する。

②ファーストオリゼ箱粒剤、Dr.オリゼ箱粒剤(いずれもプリンス剤との混合剤を含む)及びルーチン粒剤のいずれかを箱当たり25～50g散布する。箱当たり散布量が25gとして使用可能なのは、10a当たりの使用箱数が20箱以上の場合である。

③ルーチンフロアブル100倍液を箱当たり500mL散布する。

エ、側条施用剤を使用する場合は、ペースト肥料では側条オリゼメート顆粒水和剤(オリゼメート顆粒水和剤)又はツインターボ顆粒水和剤、粒状肥料ではコープガード剤で行う。また、移植同時施薬機を用いる場合は、オリゼメート粒剤20、Dr.オリゼパディート粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤のいずれかで行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	平年並 (前年より多い)
(リゾープス菌)	—	平年並 (前年よりやや多い)
	—	平年並 (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（ピシウム菌 /±、リゾープス菌 /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗期間中、低温時はできるだけ温度を確保し、土壌の湿度を適切に保つ（ピシウム菌）。

イ、出芽期間中は32℃以上の高温にしない。また、育苗期間中は高温に注意し、適切な温度管理を行う（リゾープス菌）。

ウ、床土にオラクル粉剤、タチガレエースM粉剤、ナエファイン粉剤を使用しなかった場合や播種時にオラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤、ナエファインフロアブル、ヘッド顆粒水和剤、ランマンフロアブルを使用しなかった場合は、発芽後、発病前にタチガレエースM液剤をかん注するか発芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注する（ピシウム菌）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. イネミズゾウムシ	平年並（前年よりやや遅い）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/ ）。

イ、前年の第1世代成虫の誘殺数は少なかったことから、越冬量は少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年6月の食害株率が90%以上に達していたほ場では、次のいずれかの方法で防除を行う。

- ①パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08などのいずれかを育苗箱に施用する。
- ②ダントツ水溶剤、バズ顆粒水和剤、ヘッド顆粒水和剤（播種時処理）などのいずれかを育苗箱にかん注する。
- ③コープガードW12、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤、ツインターボ顆粒水和剤のいずれかを移植時に施用する。また、移植同時施薬機を用いる場合は、D r. オリゼフェルテラ粒剤で行う。

イ、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤又はプリンス剤に対する抵抗性のイネクビボソハムシ（イネドロオイムシ）が確認されている地域では薬剤の選択に注意する。

ウ、移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、6月上旬に防除の要否を判断する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. イネクビボソハムシ （イネドロオイムシ）	平年並（-）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温と降水量は、ほぼ平年並と予報されている（±/ ）。

イ、前年の発生量がやや少なかったことから、越冬量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、イネミズゾウムシを対象として移植前～移植時に殺虫剤を施用したほ場では、本種の防除の必要はない。

イ、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤又はプリンス剤に対する抵抗性が確認されている地域では薬剤の選択に注意し、次のいずれかの方法で防除を行う。

- ①パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤などのいずれかを育苗箱に施用する。
- ②バズ顆粒水和剤、ヘッド顆粒水和剤（播種時処理）などのいずれかを育苗箱にかん注する。
- ③コープガードW12、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤などのいずれかを移植時に施用する。また、移植同時施薬機を用いる場合は、D r. オリゼフェルテラ粒剤で行う。
- ウ、移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、産卵盛期（6月上～中旬）に防除要否を判断する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ)	平年並（前年より遅い）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、4月上～中旬の気温は低い～平年並で、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されていることから、越冬世代成虫の発生時期は平年並と見込まれ（±/ ）、水稻の移植時期と重ならないため産卵量はやや少ないと推定される（ /-）。

イ、前年の発生量がやや少なかったことから、越冬量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、極端な早植えや遅植えを避ける。また、移植時の深植えや移植後の深水を避ける。

イ、前年多発したほ場では、スタウトパディート箱粒剤、ルーチンデュオ箱粒剤、ルーチンパンチ箱粒剤、パディート箱粒剤、ブイゲットブランドオンコル粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、フェルテラ箱粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、プリンス粒剤、D r. オリゼフェルテラ粒剤のいずれかを育苗箱に施用する。または、ガードナーフロアブルを育苗箱にかん注する。

ウ、上記の育苗箱施用剤を使用しなかった場合は、移植後に産卵状況を確認し、発生が多いときは被害初期にエルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン粉剤DL、トレボン粒剤のいずれかを散布する。

エ、本種の被害は突発的に発生するため、今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. フタオビコヤガ（第1世代） (イネアオムシ)	平年並（-）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温、降水量、日照時間はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、前年の第3世代の発生量がやや少なかったことから越冬量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では、フェルテラ箱粒剤、プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤のいずれかを育苗箱に施用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. イネキモグリバエ (イネカラバエ)	-	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、前年の発生量は少なかった（ /- ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では、以下の防除対策を実施する。

①イネ科雑草の茎の中で越冬するため、6月上旬までに畦畔の除草を行う。

②グラントオンコル粒剤又はブイゲットグラントオンコル粒剤を移植当日に育苗箱に施用する。

B 小麦

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 赤かび病	やや早い（-）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温、降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、秋田地域振興局管内の定点調査ほでは、4月15日現在の幼穂長は11.0mm（平年差+3.4mm、銀河のちから）であった（-/ ）。

ウ、前年収穫期の発生量は平年並であった（ /± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多肥栽培を避ける。

イ、1回目の防除は開花始期にシルバキュアフロアブル又はストロビーフロアブルを散布し、2回目は1回目の防除から7～10日後にイオウフロアブル、石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、トップジンM粉剤DLのいずれかを散布する。

ウ、開花始期に1回目の散布ができないと予想される場合は早めに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. うどんこ病	-	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温、降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（ /± ）。

イ、前年乳熟期の発生量は多かった（ /+ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本病は厚播、多肥、過繁茂のほ場で発生しやすいため、適切な肥培管理に努める。

イ、イオウフロアブル、ストロビーフロアブル、石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、プロパティフロアブルのいずれかを発生初期から2～3回散布する。

ウ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。

C 大豆

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. タマナヤガ	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月1～4半旬の誘殺数は2頭（平成18.5頭）で少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の除草を行う。
イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

①クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

②播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。

③播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

D えだまめ

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ネキリムシ類（タマナヤガ）	—	やや少ない（—）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市大豆予察ほのタマナヤガフェロモントラップにおける4月1～4半旬の誘殺数は2頭（平成18.5頭）で少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の除草を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

①クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

②播種時にカルホス粉剤を作条施用し、土壌混和する。または播種時にカルホス微粒剤Fを土壌表面に散布し、土壌混和する。

③播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

エ、タマナヤガの他に、幼虫越冬するカブラヤガが混発する場合があります、極早生品種作型などで被害を受ける場合があります。

E りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 腐らん病	—	多い(—)

(1) 予報の根拠

ア、4月中旬の巡回調査における発病樹率は2.7%（平年2.2%）で平年並、発病地点率は31.8%（平年22.2%）で高かった。このうち、胴腐らの発病樹率は1.0%（平年0.2%）、発病地点率は18.2%（平年3.7%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、雪害を受けた部位は早めに整形し、切除・伐採した枝は園内に放置せず、焼却する。

イ、樹体検診を実施し、早期発見と適切な処置に努める。

ウ、胴腐らの横径が枝幹部の2/3以上に拡大している場合は、治癒が困難であるため、速やかに切除・伐採し焼却する。

エ、「泥巻き」は病斑部を削り、草つき土で覆い、ビニールなどを巻く。前年に処置した部分は土を取り除いて治癒状況を調べ、必要によって再度処置を行う。

オ、雪害の整形部及び剪定痕にはトップジンMペースト又はバッチレート塗布する。

カ、枝腐らを剪去した後及び病斑の削り取り後（健全部を含め紡錘状に大きく削る）にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。なお、剪去した枝、削り屑は放置せず直ちに処分する。

キ、トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らの削り取り後のみに使用する。薬害防止のため剪定及び枝腐ら剪去後の切口には使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. モニリア病（実ぐされ）	平年並(—)	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、4月22日現在、果樹試験場（横手市）におけるふじの予測開花日は5月7日（平年5月7日）で平年並である（±/ ）。

ウ、前年の実ぐされ発生量は多かった。また、横手アメダスデータでは、ふじの発芽日（本年は4月7日）から4月20日までの間、降水量が1日当たり10ミリ以上の日数は1日（平年1.4日）で平年並であったことから、葉ぐされの感染量はやや多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、葉（花）ぐされ、実ぐされは見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。ひこばえは剪去する。

イ、葉ぐされの発生状況に応じて、次により防除を行う。

①展葉期に発生が多い場合は、速やかにトップジンM水和剤 1,000倍に展着剤ニーズ 1,000倍を加用し散布する。

②開花直前に葉ぐされの発生が見られた場合は、速やかにアンビルフロアブル 1,000倍、インダーフロアブル 5,000倍、オンリーワンフロアブル 2,000倍、サンリット水和剤 3,000倍のいずれかを散布する。

- ①多発園及びその周辺では実ぐされ防止のため、中心花満開期にトップジンM水和剤 2,000倍を散布する。さらに、株ぐされ防止のため、落花直後にアンビルフロアブル 1,000倍又はスコア顆粒水和剤 3,000倍を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 黒星病	平年並（－）	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、4月22日現在、果樹試験場（横手市）におけるふじの予測開花日は5月7日（平年5月7日）で平年並である（±/）。
- ウ、鹿角市予察ほでは、前年より早い4月4半旬にまとまった数の子のう胞子の飛散が確認された。今後、子のう胞子の飛散が多くなると予想される（ /+）。
- エ、前年6月の発生量は多く、9月の発病新梢率は3.4%（前々年1.1%）であった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内の発生状況をよく観察し、発病葉や発病果実は見つけ次第摘み取り、焼却する。
- イ、防除薬剤の選択などについては3月26日発行の防除対策情報第10号を参照する。
- ウ、薬剤散布は10日間隔を基本とし、長くならないよう注意する。
- エ、苗木には展葉後にベフラン液剤25 1,000倍を散布する。耐性菌が感染しているおそれがあるため、EBI剤は使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ナミハダニ	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、前年9月の発生量は多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、徒長枝の剪去、焼却処分を開花中及び落花20日後頃の2回行い、発生密度の低下に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. リンゴハダニ	－	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、3月上～中旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0%（平年3.2%）、寄生地点率は0%（平年10.1%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発生が多い場合は、落花直後にバロックフロアブル 2,000倍を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. ハマキムシ類	平年並（－）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、4月22日現在、果樹試験場（横手市）におけるふじの予測開花日は5月7日（平年5月7日）で平年並である（±/ ）。

イ、前年秋期の発生量は平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花直前又は落花直後に IGR 剤、BT 剤、サムコルフロアブル10、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。特に、ミダレカクモンハマキが多く開花期間中に被害（巻葉）が目立つ園地では、落花直後の散布を必ず実施する。また、訪花昆虫保護のため、開花1週間前～落花直後やミツバチ設置期間は上記以外の殺虫剤は散布しない。

イ、マツチ乳剤は、サビ果発生のおそれがあるので、落花10日後から6月下旬まで散布しない。

ウ、交信かく乱剤は、ハマキムシ類成虫発生前の5月末までに設置する。使用する面積が広くまとまるほど効果的で（最低20a）、風通しの良い狭い園地や急傾斜地では効果が劣る。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. 果樹カメムシ類	平年並（－）	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/ ）。

イ、前年秋期の越冬トラップ調査におけるクサギカメムシの越冬数は、3.6頭/地点（平年6.6頭/地点）でやや少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、飛来数が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤のいずれかを2,000倍で散布する。

ウ、殺虫剤の散布はミツバチの撤去後とする。

F なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	平年並（前年よりやや遅い）	多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温、降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、4月21日現在、果樹試験場（潟上市）における幸水の予測開花日は5月3日（平年5月3日）で平年並となっている（±/ ）。

ウ、前年9月の巡回調査における発病果そう葉率は高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、芽基部病斑を切除し、園外へ搬出し処分する。腋花芽利用率が高い園地では芽基部病斑が多い傾向があるため注意する。

イ、開花直前とその7～10日後（落花直後）にE B I剤を散布する際には耐性菌出現回避のため保護殺菌剤を加用し、散布間隔は10日以上空けない。

ウ、防除薬剤の選択などについては3月26日発行の防除対策情報第11号を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	平年並（前年並）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温、降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、果樹試験場（潟上市）における南水の発芽日は、4月8日（平年4月9日）で平年並であった（±/ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除する。

イ、落花期から袋かけまでが果実感染防止の重点時期であるので、袋かけ作業は遅れないようにする。

ウ、落花直後から7～10日ごとに薬剤を散布する。

エ、発病の多い品種は南水、八雲である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ナミハダニ	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、前年9月の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は剪去し、焼却する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. リンゴハダニ	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、3月の巡回調査における越冬卵の寄生枝率は0%（平年0.3%）、発生地点率は0%（平年3.0%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生園では落花直後にバロックフロアブル 2,000倍液を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 果樹カメムシ類	平年並（－）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温はほぼ平年並と予報されている（±/ ）。

イ、前年秋期の越冬トラップ調査におけるクサギカメムシの越冬数は3.6頭/地点（平年6.6頭/地点）でやや少なかった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、飛来数が多い場合は、エルサン水和剤40 800倍液又はスミチオン水和剤40 800倍液を散布する。ただし、スミチオン水和剤40は展葉直後の柔らかい葉で薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので注意する。

ウ、殺虫剤の散布はミツバチの撤去後とする。

G ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒とう病	平年並（－）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温、降水量はいずれもほぼ平年並と予報されている（±/±）。

イ、ぶどうの初期生育はほぼ平年並と見込まれる（±/ ）。

ウ、前年の発病果穂率及び発病葉率は、キャンベル・アーリー及び巨峰いずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは特に感染しやすいので注意する。

イ、伝染源となる前年の被害枝（結果母枝）や巻きひげは、切り取って処分する。

ウ、新梢伸長期にオーソサイド水和剤80 800倍、新梢長15～20cm頃にデランフロアブル1,000倍を散布する。ただし、デランフロアブルは展葉数2～3枚時に散布すると薬害（葉の褐変）を生じるおそれがあるので注意する。

エ、発生が多い園では、5月中～下旬にインダーフロアブル 8,000倍又はマネージD F 6,000倍を散布する。

IV. 気象予報

平成31年4月18日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（4月20日～5月19日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わります。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北地方日本海側）

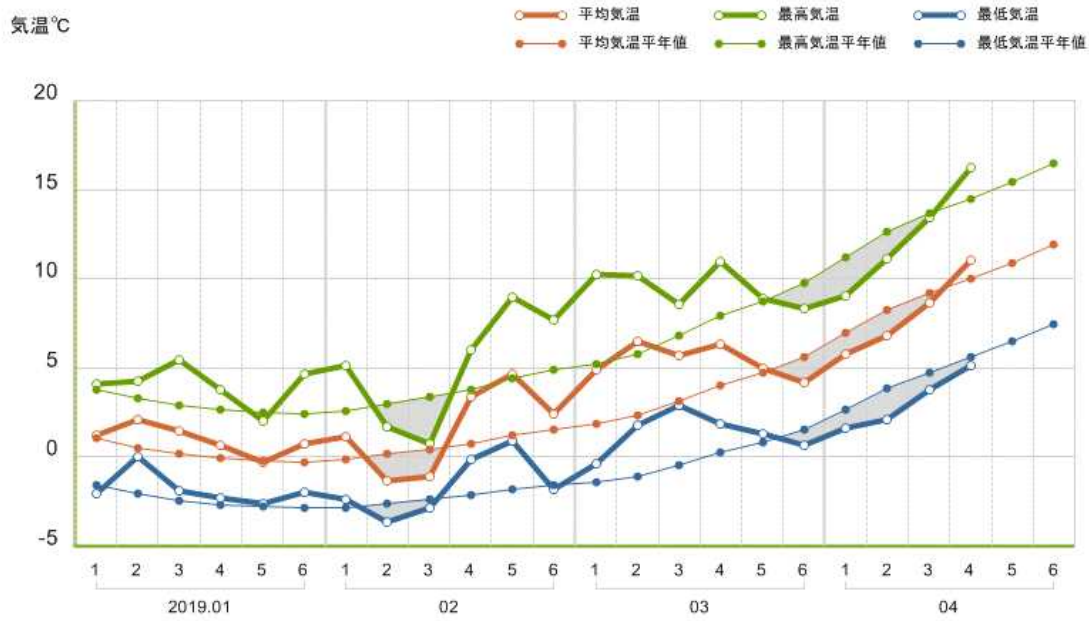
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30%	40%	30%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北地方日本海側）

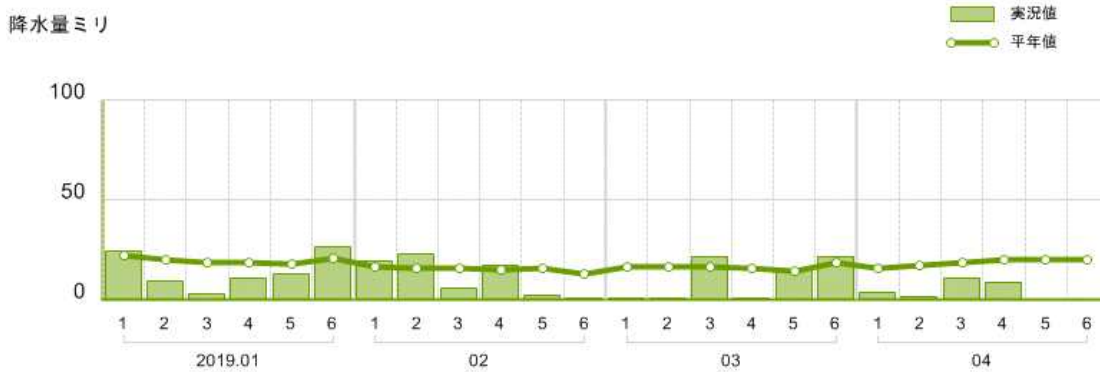
	低い	平年並	高い
4/20～4/26	10%	40%	50%
4/27～5/3	40%	40%	20%
5/4～5/17	40%	30%	30%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～4月4半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い	平年並					やや遅い	遅い				

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並
	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水等の容器等）へ移し替えない。